



誌面にかざせば
スマートフォンで
動画が見られる！
COCOAR

ハンナ

Hanna

ショパン別冊

2013年 9・10月号 No.3

うたと合唱とオペラ

昭和59年5月2日発行 3種郵便物認可 平成25年8月16日発行 別冊 No.55

幸田浩子



はじまる。

第九
シーズ
ズ

特集

オフロインデー！
歌声ひびく日本列島



モスクワ合唱団



山田邦子
モスクワ合唱団
関西 中之島が面白い！
全国合唱団あらかると
ホーミーのどきだの秘密
「三文オペラ」/「夜叉ヶ池」
LEGEND Jammin' Zeb
ESCOLTA

「三文オペラ」

楽譜付『なぎさの地球』混声四部合唱

オペラ劇場あらかわバイロイト

オペラ監督



(たなべ・とおる)
ドイツ・北ハルツ劇場専属バリトンとして年間150公演を行う。2000年以降は新国立劇場をはじめ日本のオペラにも数多く出演。2009年「オペラ劇場あらかわバイロイト」を立ち上げ、歌手兼オペラ監督を務める。また東京国際音楽コンクール事務局長・審査員として若手の育成にも尽力している。名古屋芸術大学客員教授、国立音楽大学講師。東京二期会会員。

田辺とおる

インタビュー

初めてです。

——見所を教えてください。

「あらかわ」なりの見所というのは、やはりわれわれのキャンパニーというのは、値段もリーズナブルで、行きやすい公演ということが目玉です……。演出のコンセプトがどういうふうになるかというのはまだ詰めてないですが、僕も楽しみにしています。音楽はご存知の通り大変素晴らしい。独特な魅力がありますよね。《トリスタン》が一番好きだという人が多いし、われわれ全員いつか《トリスタン》をやろうというのではありません。念願の《トリスタン》上演になることは間違いないです。

——日本ではワグナーというと演奏会形式というところが、まだ日本人の限界なのかなと思ってしまいます。

ひとつはやり方がオール・オア・ナッシングだからだめなんだと思います。純然たる音楽的視点だけから見たら、例えばワグナーが「第1ヴァイオリンは16本」と指定していたら16本使いたいじゃないですか。「ドラマティック・ソプラノ」と書いてあったらドラマティック・ソプラノを使いたいじゃないですか。それを「だから日本人にはできない」と言ったら、《オテロ》をやろうが何をやろうが「メトロポリタン歌劇場よりも下手だからやるのをやめた」というのと同じ話だと思うので……。「あらかわバイロイト」が目指すものは、何せうちはピットも小さいですから弦楽器も減らしている。しかしストウツティ（全合奏）で鳴らした時に管楽器が1本ずつ減っていると、歌手が喉がちぎれるぐらい大きな声を出さなければ聴こえないということが回避できる。それは日本人日本人というけ

アニメ監督の山賀博之演出による

ワグナー《ラインの黄金》公演（2012年11月）で話題を呼んだ

「あらかわバイロイト」のオペラ監督・田辺とおる氏に話を伺った。

裾野が広い「地方劇場」

——なぜ荒川という地でワグナーをやるに至ったのでしょうか。

「下町発」という構想的なもので言えば、もともとが僕も音楽監督のクリスティアン・ハンマーも、出会ったのがドイツの地方劇場なわけです。ドイツの大劇場の来日公演を楽しむ人が多いけれども、実はドイツの劇場地図を支えているのは数で言えば地方劇場です。ドイツが世界に誇れるものは、電車で30分も乗れば必ずアンサンブルを持った自前の劇場がある、そういうシステムです。聴衆を育てるのもそうだし、歌手・演奏家・演出家が小さい劇場から始めてステップアップしていく、そういうピラミッド型のシステムで、非常に裾野が広い。

劇場の経営予算というのは公的補助ですから、80%以上は税金で運営される。小さい

町でもその割合は変わりません。予算は小さいけど、その中でワグナーをやろうが何をやるうが、その地元の人たちに喜ばれる劇場経営をするというのがドイツの劇場の裾野の広い一番の特徴なんだと思っていて、日本に帰って来た時に地元密着型の市民オペラで形でやりたいというのはありました。荒川であるというのは、たまたまこの事務所が小規模のオペラを前からやっていて、そこに歌手として参加した時に理事長と話をしてもう少しコンセプトをしっかりと立ち上げましょうと、そんなことから始まりました。

ワグナーは声に良くない？

僕が20年ぐらいドイツに住んで、日本に戻って来てオペラ界の現状を見ていろんなことを感じたわけですけど、その中の大きなもので、音楽家がオペラをやるならイタリア系

舞台上演する《トリスタン》

——「あらかわバイロイト」で《トリスタン》と《イゾルデ》が取り上げられるのは今年が初めてですか？

ど、僕やクリスティアン・ハンマーは地方劇場でワグナーをやってますから、同じようにドイツの劇場でやって弦の数とか縮小してるわけです。16本というのはバイロイトでやるためのものですから。だけどあれだけ素晴らしい曲というのはどんな地方劇場に行ったらやるわけです。Aクラスの劇場だけじゃなくてBクラスの劇場もCクラスもDクラスも、みんなその時にそれぞれの劇場でそれなりの工夫をするわけです。だからそこは一線を引いて考えなければならぬ。ドイツの劇場の発想というのはそれで、オペラというのはとにかくオペラをやることをオペラというんだと。そこには当然衣装が付いて舞台が付いて歌手が芝居をして、それがオペラじゃないですかと、そういうことがたぶん大事です。ワグナーは台本も自分で書いてますよね。台本には彼の劇作家としての視点が色濃く入っているわけじゃないですか。それは演奏会形式では再現できませんよね。だからオケも小さくちやうし、うちの若手歌手を使うということもあるだろうし、そういう中でも《トリスタン》というオペラをやるんだという、そこがやっぱり「あらかわバイロイト」の見てほしいところなんです。観たい人というのはオペラを観に来るんだから、オペラにしなければだめじゃあ決まってる。僕はそういうある意味単純な発想です。ワグナーをワグナーだからと神棚に置かない。その作品を社会に届けるのが僕らの仕事だから、その時にできる方法を探していくということがやっぱり大事で、芝居という重要な一要素を簡単に切ってしまうのはやっぱりだめなんじゃないかと思えます。だから「ちよつとずつ減らす」わけです。舞台も簡素にしなければうちはやっちゃいけない。音楽の方もオケの編成を簡素にしなければいけない。合唱団も人数が十分でない。だから全部のセクションを均等にスリムにする。フルオケをするために精一杯だから舞台は無し、み

たいなのはうちはやりません。均等にスリムにしていつて何とか上演できないか。全部を丸々やるというのはこれもまたやっぱりできないので、均等にスリムに。

ワグナーの「長さ」と象徴性

——でも《神々の黄昏》(2011年9月)はすつきりして、かえって良かったと思えます。

やっぱり象徴的な意味ってありますよね。ワグナーの劇ってすごく長いから。じゃあなぜそこに長さという必然性があったのか。ワグナーは、ライプツィヒに生まれてドレスデンで育った、生粋のザクセン人なんです。ワグナーの歌詞というのはザクセン訛りがすごくあるんですね。メロディックな Ariaではなく、対話調のレクタティーヴォの音の高低・長短にそれがよく表れています。また言葉の選択や言い回しからもそれが感じられます。

ザクセン人というのは陽気でおしゃべりで知られてるんですね。当時ワグナー対アンチ・ワグナーの議論がありましたよね。あそこでワグナーが揶揄されて「あのおしゃべりザクセン人が」みたいな悪口を言われています。まあ《リング》は長いです。言葉数が多いです。これは非常にザクセン人的なおしゃべりだとは思いますが。でもそれ以上にワグナーは音楽を太らせたわけですね。《トリスタン》の第2幕なんかいい例ですよ。愛のデュエットで45分とかやっちゃうわけです。それはやはり「象徴」でしょう。シンボリズムというもんだと僕は思います。ものは動いてなくていい、そのことがずっと停止しているかのようにずっと継続していることが全体の長さとしてのウェイトをもって「ああ、なるほどこれは愛なんだ」という。「愛は永遠です」って一言で言っちゃったっていいんですけど、じゃあその長さは何を象徴し

たかという、その重みを象徴している。ですから今《神々の黄昏》の演出の話に戻りますけど、単純なお金のかかってない装置でいるんなものをシンボライズして作っているわけじゃないですか。そのシンボライズするということにはワグナーの意図には合うだろうと思えます。特に《トリスタン》はそうだと思います。あれ何もシンボライズしないと全然面白くないですよ。あまりにも動きなさすぎだから。30分抱き付いて動かないラブ・デュエットとか、そこにライトや何かが変わるということでその愛のいろいろな意味合いの陰影が付いてくる。やはりシンボライズですよ。具体的にどうこう何かをしているわけではない。そういうシンボライズの手法は、ワグナーのスピリットにとっても合うものだと思います。だからちよつとずつスリムにと言ったけど、そういう抽象的な演出のしやすい作品なんじゃないですか、どちらかという。

——舞台の抽象性とワグナーの音楽の象徴性がマッチする……。

そうですね。そしてこのような素晴らしい作品に携わることのできる幸せを、観客の皆様と共有できれば、と思います。

(2013年5月23日、東京国際芸術協会にて)

2012年11月《ラインの黄金》 ©長澤直子



【公演情報】

オペラ劇場あらかわバイロイト 第5回ワグナー音楽祭
ワグナー生誕200年記念《トリスタンとイゾルデ》
音楽・セリフ共にドイツ語上演・日本語字幕付き
2013年11月23日(土・祝)A公演13:00 / 24日(日)
B公演13:00
会場：東京・サンパール荒川 大ホール
指揮：クリスティアン・ハンマー
演出：大島尚志
トリスタン：伊東大智 / 池本和憲 イゾルデ：及川睦子 / 福田祥子
ブランゲーネ：小畑朱実 / 河村典子
マルケ：小野和彦 / 郷田明倫 クルヴェナル：田辺とおる / 杉野正隆
管弦楽：TIAA フィルハーモニー管弦楽団
全指定席：S席¥12,000 A席¥10,000 B席¥6,000 C席¥4,000
主催・お問合せ：一般社団法人 東京国際芸術協会
03-3809-9712 www.tiaa-jp.com